

討論のまとめ

木簡学会は、一九九八年十二月を以て創立二十周年を迎えた。委員会ではその記念事業として、研究集会におけるシンポジウムの開催を企画し、テーマを長屋王家木簡とすることに決定した。長屋王家木簡を学会でとりあげることは長年の懸案であったが、この木簡が検出されて十周年という年にそれが実現したことになる。

委員会では、シンポジウムのメンバーに、渡辺晃宏（奈良国立文化財研究所）、勝浦令子（東京女子大学）、櫛木謙周（京都府立大学）の三氏を委嘱し、司会は東野（奈良大学）が勤めることとなった。

シンポジウムの進め方については、事前の打合せ会で統一テーマのようなものは設けず、渡辺、勝浦、櫛木三氏が各々の関心に従って基調報告を行い、それをめぐって討議を行うことを確認した。この方針は、すでに発掘から十年を経過して、遺跡の正式報告書も刊行され、木簡の報告書も刊行の緒にいた状況に鑑み、研究者各自の視点から研究を深めてゆくべき段階にあると判断したところから来ている。

当日は、司会の東野からシンポジウム開催の趣旨についての説明と、これまでの研究状況に関する簡単なまとめが行われたあと、三氏による報告に移った。

渡辺氏の報告は、長屋王家木簡の中で膨大な数にのぼる削屑をとりあげ、その記載内容や年紀、廃棄状況などを分析して、長屋王家木簡の性格を明らかにしようとしたものである。多くのデータを緻密に処理した報告で、従来その機能について包括的な議論の之しかった横材木簡についても、伝票木簡との具体的関係を論じられた。実際に長屋王家木簡の整理に当たってこられた渡辺氏ならではの、手堅く示唆に富んだ報告であった。

勝浦氏は、長屋王家木簡の中で数的には顕著な一群をなす伝票木簡に焦点をあてられた。氏は主に米、飯の請求、支給に関係するこれらの木簡を、二条大路木簡や正倉院文書にみえる同種の史料、関係記事と比較検討しつつタイプ分けされ、結果として、長屋王家木簡におけるいわゆる伝票木簡には、請求と支給の両様の機能が複合していることを論じられた。長屋王家木簡の特殊性と普遍性を、どのように理解すべきかについて一つの方法を示した報告であり、広く律令文書制を考える上にも有益な発表であった。

櫛木氏の報告は、長屋王家の経済に対する関心を背景に、主として荷札木簡の特徴を分析されたものである。氏は、税目や負担の種類の違いが、直接荷札の書式の相違に反映しているとする見方を再検討し、荷札の記載形式や斗量を手掛かりに、貢納物収取の実態や貢納物の性格に迫ろうとされた。交易や労働力編成の問題に取りくんでこられた櫛木氏らしい切り込みであり、荷札研究に新しい視角

を提起されたものといえよう。以上三氏の報告は論文として本号に掲載されているので、詳細はそれらを参照願いたい。

三氏の発表をうけ、フロアを含めての討議に移行したが、残念ながら討議は活発さを欠く点がないではなかった。

多くの参加者の関心は、邸宅論や家政機関の系統論のような、もっと大づかみな議論にあり、それに対して報告が、やや玄人好きなテーマに徹しすぎたところがあったかとも思われる。ただそれはそれとして、討議に大きな実りがあったことも確かである。

いま、討議の中で出た主な質疑応答を紹介すると、まず渡辺報告については、大御飯米の木簡や矢口司移をめぐって、狩野久氏（岡山大学）からその性格を問う質問が出され、渡辺氏は大御飯米の木簡は請求文書が伝票になったもの、矢口司移は伝票であると答えられたが、勝浦氏は、自身の報告の趣旨とも関係して、矢口司移は請求文書が伝票の役割をも果たした例であろうとコメントされた。大御飯米の木簡を木上からの米進上状と解する福原栄太郎氏（神戸山手女子短期大学）は、渡辺氏の解釈になお疑問を感じるとされた。また山口英男氏（東京大学史料編纂所）から、形のある木簡の日付は廃棄時点に近いとみられるか、伝票の日付は実態と見てよいかの問いがあり、渡辺氏から肯定的な答えがあった。

勝浦報告に関しては、邸内で帳簿管理が行われた目的につき山口英男氏の質問があり、二系統の家政機関の間で必要であったとの答

えがなされた。櫛木報告をめぐっては、鎌田元一氏が駅戸の成員からの米貢進につき、駅戸は封戸になりうるかと尋ねられたのに対し、櫛木氏は、個人名は春成者ないし出挙稲受給者かと回答された。また笹山晴生氏（学習院大学）から、税司は国衙機構の一つではとの問いがあり、櫛木氏は伝世の封戸所有者の下にあったものが国司の管下に入ったとも考えられるとされた。さらに水野柳太郎氏（奈良大学）が、天平期の封戸との相違を問題にされたのに対し、櫛木氏は年代の古さ、長屋王の特殊性を考えるべきであろうとされた。

その他、石上英一氏（東京大学史料編纂所）が、事務処理を木簡だけで済ませた可能性を問われたのに対し、勝浦氏が「用米」「遣」の記載ある削屑をあげて否定され、杉本一樹氏（宮内庁正倉院事務所）も、正倉院の木簡転用軸などをあげて同調された。また表記や文体について、狩野久氏が口頭言語と和文体の相関関係を問われたが、大飼隆氏（愛知県立大学）は関連を否定され、小谷博泰氏（甲南大学）は藤原宮木簡以前の方がより口語を表していると述べられた。また伝票木簡に類出する「受」は「さずく」と読めることが、複数の方から指摘された。

種々反省点の残る結果とはなったが、報告いただいた三氏に感謝するとともに、これを契機として更に研究が進展することを期待したい。

（東野治之）